

2種のAPTT試薬での乖離検体の解析

◎堺澤 克磨¹⁾、佐藤 聖子¹⁾、水谷 有希¹⁾、寺島 みさき¹⁾、蛭川 澄玲¹⁾、井上 優花¹⁾、大澤 道子¹⁾、藤田 孝¹⁾
藤田医科大学病院¹⁾

【背景】APTT測定はかねてより標準化の問題が指摘されており、組成が異なる試薬によって測定値に差を認めることから、機器・試薬変更時には臨床へ十分な案内が求められる。当院でも2020年5月にLSIメディエンスのヒモシアレルンサルAPTT (APTT-SS) から積水メディカルのアグピアAPTT-N (APTT-N) への変更時に相関性評価を行った結果、抗凝固薬を投与されていない症(132件)で $y=1.3186x-8.6985$ $r=0.76629$ であったが、APTT-SSで基準範囲内であったにも関わらず、APTT-Nで延長(39.0秒以上)となった症例を認めた。

【目的】導入後も同傾向が散見され、臨床より問い合わせを受ける例もあったことから原因追及のために詳細な解析を行った。

【対象】2020年5月から2020年12月に凝固検査を実施し、同意の得られた検体63,470例

【検討内容】①APTT-N/APTT-SS比(APTT比)を求め、凝固線溶項目、CBC、生化学検査との関連性を評価した。

②APTT-SSが基準範囲内でAPTT-Nが39.0秒を超える症

例で、APTT比が1.3を超える症例(1,016件)について診療科や病名、投薬などの患者背景を調査した。③抗凝固薬未使用症例28件についてクロスミキシング試験(CMT)を実施し、波形の目視判定およびIndex of Circulating Anticoagulant値(ICA値)の解析を行い、ループスアンチコアゲラント(LA)の関与について調べた。

【結果】①APTT比はCRPと相関性を認め、CRPのカットオフ値を1.4mg/Lとし、APTT比との相関は $y=0.0659x+0.9389$ / $r=0.577$ / $p\text{-value}<0.001$ であった。②抗凝固薬使用例が324件、未使用症例が692件であった。③目視判定、ICA値ともにLAの存在が疑われる症例17件、目視判定は困難だがICA値でLAを含むインビクタパターンと判定できた症例が6件、目視判定、ICA値ともにインビクタパターンと判定し難かった症例が5件であった。

【まとめ】炎症反応の度合いに応じてAPTT-Nで延長を認めることが示唆された。また、CMTの結果より炎症による一過性のLAの関与が示唆された。

連絡先：0562-93-2307